

けにや、冷泉院は御物氣によりて、中一年にておりさせ給ぬ、さて圓融院の御方めでたけれど、花山院の御事などあさましと云もことおろかなり、その御弟にて三條院おはしますを、いたづらになしまるらせんとおもひて、かゝるやうどもは出さけるにや、

〔神皇正統記 後一條〕天曆上の村の御時、元方の民部卿のむすめの御息所結の、一のみこ廣平親王

をうみ奉る、九條殿師輔の女御子安まゐりたまひて、第二の皇子冷泉によいできたまひしこ

ろより悪靈になりて、このみこも邪氣にあやまされまじき、花山院俄に世をのがれ、三條院の御

目のくらく、此東宮院敦明小一條のかく身づから去りぞき給ひぬるも、怨靈のゆゑなりとぞ、

〔天鏡五太政大臣公季〕このおほきおほどの公藤原の御は、うへは、延喜の御門醍醐の御女、女四宮

子康略ときこえさせき略中この太政大臣をはらみたまつり給ひて、中つひにうせさせ給ひ

にし、中このうみおきたてまつらせ給へりし太政大臣殿をば、御あねの中宮后安子さらなり、

よのつねならぬ御ぞう思ひにおはしませばやがてやしなひたまつらせたまふ、うちのみ

おはしまして、みか上村もいみじうらうたきものにせさせ給へば、つねには御前にさぶらは

せ給ふ、なに事も宮たちの御おなじやうにかしづきもてなし申させ給ふに、御ものめす御だいの

たけばかりをぞ一寸おとさせ給ひけるをけぢめに、去るきことにはせさせ給ひける、むかし

はみこたちもをさなくおはしますほどは、うちすみせさせ給ふ事なかりけるに、このわか君公

季のかくてさぶらはせ給ふは、あるまじき事とぞ去り申せど、かくておひたせ給へれば、なべ

ての殿上人などになすらはせ給ふべきならねど、わかうおはしませば、おのづから御たはぶれ

なごのほどにも、みなくゝにふるまはせ給ひしなれば、圓融院御門おなじほどのをとこどもと

おもふにや、かゝらであらばやなどぞうめかせ給ひける、又御むまごの頭中將公成君をことの

ほかにかなしがり給ひて、うちにも御車の去りにぐせさせ給はぬかぎりはまゐらせたまはず、